横谷宗珉

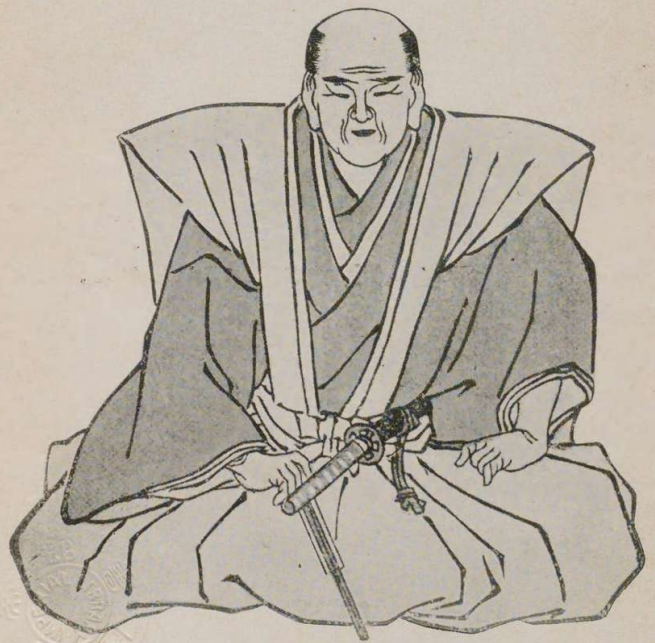
232
383
232-383
1200701769765

横谷宗珉

正誤

十六頁　七行　金ハ全ノ誤
十六頁　八行　憶ハ憾ノ誤
四十二頁　十一行　寄ハ奇ノ誤

横谷宗珉



正誤

十六頁　七行　金ハ全°ノ誤
十六頁　八行　憶ハ憾°ノ誤
四十二頁　十一行　寄ハ奇°ノ誤

緒言

横谷宗珉は徳川幕府最盛期の元祿時代に現はれた金彫界の巨匠であり實に名人であります其工作に對して他の追隨をゆるさず而して遂に後人をして其域に達する能はざらしむるのみならず實に其差雲泥萬里の距離がありますから夫れ故に眞贋の別は一目瞭然であります斯の如きは技術眞に人工に超越するのみならず能く神域に入るにあらざれば到底不可能の事と思はれるのであります。

由來本邦刀劍金具彫刻の沿革を調査しますと刀裝の金具は既に古墳發堀の所謂神代刀時代より存在致しますので、相當古い歴史を持つて居りますが、其作者に就いても、亦變遷に就いても遺憾な

がら判明を欠いて居るのであります、中世足利義政の侍臣、後藤祐乘が其勤仕の傍ら、美濃彫の金彫法を會得し、目貫、笄を製作したるより、初めて金工の道定まり、子孫其技を傳へましたので、後藤家を以て金工の宗家として天下にゆるされるに至りました、而して後藤家彫金の信條とする處は、寫生に非ず、又繪畫に據らず、自づから不即不離の內に物体を現はすを以て彫刻の本旨とし、圖樣の如きも武士道に於ては智略、勇猛、即智勇兼備を尊びたる故に、文珠菩薩の智惠を取りて獅子の圖を作り、又勇猛の出現として龍の圖を製して、當時の時好に適する樣に致したものであります、夫れ故に後藤家に於ては、此龍、獅子の彫法を原則として、子弟を敎養したもので龍、獅子の彫刻さへ相當に出來れば、他の物は不可能でも、後藤派にては立派に一人前の金工として及第した事は、明治維新頃迄も

其遺風が殘つて居りました、初代祐乘より、五代目に當る德乘が、豊太閤に召出され、慶長大判の作製に當り、爾後大判墨書は其家の業となるに及び、家格大に揚り、又金工の技に於ても、正に天下を掌握したるの觀がありまして、子弟門葉頗る殷盛を極めたのであります、慶元兩度の戰陣を終はり、德川氏の天下全く定まり、天草、慶安等を經て、世人漸く亂を忘れ、弓は袋に、刀は鞘にの、泰平を謳ふに至りては、當然の結果として社會の風俗漸次奢侈に流れ、元祿年間には所謂伊達風俗を遺すに至り、自然刀裝の上に於ても、後藤家の傳統的の彫刻に滿足せざるもの漸く多き傾向を、橫谷宗珉が觀破すると共に、繪畫に於て一世を風靡したる狩野探幽の圖樣に則り、又英一蝶の飄逸氣拔なる筆意に據りて、先人未踏の境域を開き、遂に繪風彫刻の一派を興し、範を後世に遺したる功績顯著なるものがあ

ります、一門子弟其風を倣らひ、後人又之れを模する者頗る多しと雖ども遂に其足跡を踏むに留まる、昔日より其名聲高きが故に僞物贋作亦尠なからず、然れども其別眞に一目瞭然たる處は名人の名に背かざる眞に感服の外ないものであります、茲に多年研究したる作風變遷の考察を披瀝せんとするに當り、先年有馬家藏品入札會の席上横谷宗祐が其家の記錄より拔萃したる宗珉の名品二王二所、獅子三所及虎小柄等の製作年月を見るに及び多年研究しました銘振りの年代に就き稍判明するに至りました、銘振りに就きましても小銘、大銘の二樣ありて古來諸說紛々として定まらずに居りましたが、茲に正眞の名作を蒐め其銘振りと共に寫眞を掲げ其前後の作を推定し、自家一個の說を明らかにし、大方諸彦の斧正を乞はんが爲め此書を草しました、此書の如きは宗珉大先生の名聲に對しては何等錦上花を添ゆるものではなく畢竟蛇足に過ぎない樣に思はれるのであります。

本年は恰も宗珉先生物故の年即享保十八年より二百年に正當致しますので、舊八月六日の忌日に年回を營みますに當り記念として此書を上梓致しました、金彫界に一紀元を作りました名工宗珉大先生の如きは、假令後年に至りまして展墓吊靈の人なきに至りましても遺されたる神技名作は萬世眞に不變にして又其高名は千載益赫々たる光輝を發し、萬代愈芳しかる事は疑ない處と思はれますので先生以て瞑すべきであります。

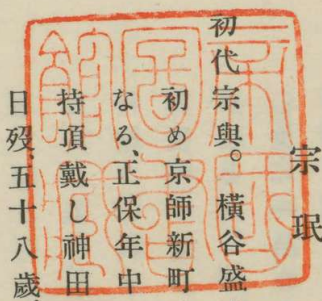
昭和壬申春

小倉惣右衞門識

目次

宗珉家系
彫法變遷
名品作風
先輩諸說
傳說考察
作品寫眞 附銘振變遷
死後餘光

宗珉家系



初代宗與。横谷盛次、又友周、通稱治兵衛、世に祖父宗與と稱す、初め京師新町武者小路住、寛永年中江戸に下り後藤殿乘門と為る、正保年中に御彫物御用仰付らる、御藏米二百俵に十人扶持頂戴し神田檜物町に住す、横谷祖なり、元祿三年十二月十七日歿、五十八歳、釋宗與禪定門と號す

（註）後藤殿乘は後藤本家七代顯乘の三男にして光富と云ふ、元和七年生、元祿二年一月十一日歿、享年六十九歳とあります、宗與は寛永十年生でありますから殿乘長ずること十二歳であります

二代宗珉。横谷氏、諱は友常、通稱長二郎、後治兵衛と改む、遯庵

と號す、初名宗知は家彫風の時なり、横谷宗與の實子なり、思ふ所ありて扶持を辭し、專ら町彫を營む、其技藝の精妙なること祐乘以來の名人と云へり、宗珉常に後藤の家風を彫り、徒らに模造に陷るを厭ひ、一機軸を出し名を後世に遺さんことを希ひ、探幽に據り、又英一蝶に因み、其下繪を求め、繪風彫金を創意して遂に一家を爲せり、傳へ云ふ寶永の頃紀文、宗珉に牡丹の目貫を望み、手附金金拾兩を送る、三年を過ぎ猶ほ成らず、紀文待佗びて頻りに催促せしを、宗珉其意に適はず、手附金を戻し、其後稍や過ぎて出來す、紀文と比びたる富豪某に與ふ、某金五拾兩を與へて之れを謝す、宗珉是れより一輪牡丹を彫らず、故に世に一品の名物となり、賞美少なからず、享保十八年癸丑八月六日歿す、六十四歲、淺草本願寺中等光寺に葬る、遯庵宗珉禪定門と號す、宗珉子なし、横谷宗壽二男宗與(友武)を養子とす

(註)宗珉は寛文十年の生れであります、又前記に宗與の實子とありますが、一說には宗與の實子宗知が貞享四年に早世したので、養子になつたと云ふ說があります

三代宗與。横谷宗壽二男、宗珉養子、友武又友貞と云ふ、享保十年生、安永八年六月二十八日歿す、享年五十五歲、旭庵照溪後宗與禪定門と號す

四代宗珉。三代宗與男、友次、明和三年家督、天明八年五月二十五日歿、一庵閑樹後宗珉禪定門と號す

一、横谷宗壽、宗珉門、三代宗與の父、慶安三年生、享保十九年歿、享年八十四歲

(註)諸書宗珉門と記すれども、享年より打算すれば、宗珉に長

ずる事十九歳となります、又横谷姓より考へますと、之れは祖父宗與の有縁の人で或は弟とか、又は叔姪の間柄で、其門に入りたる人ではないかと思はれます

一、横谷宗祐、宗壽長男、三代宗與の兄、伊右衛門と稱し、英精又宜貞と銘す、江戸新橋内山丁に住す、享保七年生、安永元年歿、享年五十一歳

（註）宗祐の手紙に、宗與の家と一家の如く誌されたるものあれば、横谷氏は宗珉の家を本家とし、宗壽の家を別家と解されたる時代ありし如く推察することを得

此の以外に、友武、宗與二男あれども略す

以上横谷家系譜に就いて疑義がありますので茲に出します、之れは昨年在獨の原震吉先生の御説もありましたが、横谷宗壽は享保十九年に享年八十四歳で物故し、其長男宗祐は享保七年生、二男宗與は享保十年生とあります、之れにより父子の年齢を調査しますと、宗祐は父宗壽七十二歳、宗與は七十五歳の時の出生となりますので、信じられない様に考へられます、殊に獨逸博物館在庫中に宗與作に行年六十三歳とある物があると云ふ事實と、又他にも七十一歳の行年がきのある緣があり又行年五十八歳とある緣頭も見ましたので、三代宗與の歿年五十五歳に疑問が起ります、等光寺に就いて過去帳を聞き合はせましたが、既に燒失して不可解であります、又二十歳も年長の宗壽を宗珉門と記入してある事も亦疑問が起ります、之れ等は猶確然たる證據がなければ確定するものでありませんが、私の考へを忌憚なく申しますと、宗壽の歿年は六十四歳で稍宗珉と同年輩とし、三代宗與の死年は七十五歳とします

と遺品の行年がきとも適合し、又父子の年齢も釣合よくなり、又宗與の子、横谷玄圃(詩人)の享保五年出生とも適合する様に考へられます、昔日遺された書類は多く筆書であり殊に草書には判讀に苦しみますものがありますので、書寫の節、誤字、誤寫の多い事は今更喋々を要しない事で、隨て以上の如き不可解の事も、起り易い様に思はれます

彫法變遷

宗珉が後藤派より出て別に一家を立て横谷派の彫法を後世に遺しました事は其遺作により何等疑ひないのでありますが只動機に就いては確證がなく。其時期に就いても判明を缺いて居りますが其作品に因り變遷の跡を考察致しますと、宗珉は寛文十年の

生れで、父宗與の死去しました、元祿三年は二十一歳であります、淺草等光寺にある墓石にも、父宗與の法名を主としてあります事等より考へますと、頗る孝心の厚い人と解されます、又昔日の不文律として、父の死後三年、其家風を改めざるをよしとしました時代なので、其の死後直に御扶持を辭し、忽ち作風を改めたとは考へられない様に思ひます、又英一蝶と水魚の交はりで、其下繪を以て、繪風彫刻を創始したとは、古來の傳說でありますが、一蝶が元祿十一年、罪を得て三宅島に謫せられた時は四十七歳とありますので、宗珉に長ずる事、十八歳でありますが、今日でも約二十年違ひましては到底水魚の交際は出來難い様に思はれます、殊に昔日は長幼自ら序ありなど云ひました時代では、隔意ない交はりは至難の様に考へられます、一蝶が赦に遇ひて、江戸に歸りましたのは、寶永六年で、一

蝶五十八歳、宗珉四十歳でありますので、一説に宗珉は四十歳より繪風彫刻を創始したと云ふ説のありますのは、無理にも一蝶の下繪に結び付け樣と云ふ附會の傳説と思はれますので、私は宗珉は父の死後何年かの後、之れは三十歳頃よりと思ひますが、世上の形勢を觀じ、狩野探幽の繪風に據り、先づ試みに、四分一の小柄に片切彫をなし、其後高彫をなしたと解釋する事が至當の樣に思ひます、元來片切彫と云ふものは、筆法の所謂草書と比較すべきもので、即先人未踏の境域を開き、世人の注目の標的となりましたのであります、最も片切彫は後藤光勝の發明で、從來の毛彫より出發して、内片切彫を創始し、宗珉は之れを襲用して外片切彫を始め、遂に片切彫を完成したと云ふ説もあります、此光勝は後藤俊乘の男で、初名甚之亟、後八郎兵衛家を相續し、快乘と稱する人で、本家七代顯乘よ

り、分れた家柄に産まれ、享保十八年七月二十日、享年六十歳で物故したとありますので、宗珉よりも猶數年若い人であります、夫れ故に此光勝が、片切彫の創始者と云ふ事も、如何なものでありますか、兎も角も同時代に、光勝の内片切に對し、宗が外片切彫を創めましたもので、結局、片切彫は時勢に適應して、大成したと見る方が、至當かも知れませんが、宗珉と光勝の片切彫を比較しますと、一方の豪放磊落に對し、一方は古典的ではありますが、著しく萎縮して居りまして、一目到底對比する事の出來なく思はれる程の懸隔がありますが、一體此片切彫と云ふものは、宛も草書と同樣、製作に時間は懸りませんが、筆意と同樣、刀法の能く現はれますもので、其鏨行には巧拙も亦直に判明する次第で、殊に一と鏨、誤れば、全部作り替へねばならぬ程、周到の用意を必要とします、夫れ故に宗珉程の名匠で

も、其初期とも云ふべき小銘時代の片切彫には、別人と思はれる程の、拙劣な物もありますので、故加納夏雄先生の如きも、小銘は名人宗珉とは別人ではあるまいかと講述された事もありますが、之れは宗珉とても初めより名人と云ふ譯ではないので、前作即ち試作時代の物に因り、評されたものと考へたいのであります、何となれば此小銘と稱する物も亦大銘即ち名人と賞せられる物も、其の花押が金然同一でありますので、私は別人ではなく、作の前後と解釋する方が至當の樣に思ふのであります

晩年になりましては、英一蝶の瓢逸なる圖樣の筆意を遺憶なく、取り入れた片切彫の名作には、其巧妙なるに、毎々驚かされるのであります、猶此片切彫の創始は、世人の注目を引く一の手段でありまして、大宗珉の名をなす楷梯に過ぎないのであります、之れも亦昔日の傳統を尊ぶ時代、名を後世に遺さんとする者としては、眞に當然の用意と思はれるのであります、然らば大宗珉の眞面目は如何なるものであるか、以下名品の作風に就て申述べ樣と思ひます。

名品作風

大宗珉の作風を申述べるに最も適當なる事は名品の作風を眞面目に說明するのが最も良い方法と思ひますので、私が今迄に拜見した名品に就いて逐次之れより申述べる事に致します、先づ多くは世にあります、小柄より申しますと、後藤家の地板柄より脫出して、棒柄を作り、多く赤銅を地金に用ひ、七子地になし、裏板に金を張り、又は金を削繼とし、圖樣を頗る大模樣に、今までに稀なる立位置に、金、銅、又四分一を置金、色繪になし、又象嵌を配し、高肉の肉置を充分

遺憾なく彫刻し、之れに片切彫を施し、一見先づ圖樣の偉大なるに目を驚かし、細見、強健なる鑿痕に、感嘆の聲を發せしむるのであります、一體過大の模樣は、品位を落す憂ひがあるものでありますが、地金に上品なる赤銅を用ひ、又上品なる七子地に、金色繪の光彩を添ゆる故に、誠に高尚にて優美、豪放なる鑿力に、周到なる注意を拂はれたので、傳統的な更に新意のない後藤派の彫刻のみに慣れたる、當時の人々の驚異の標的となり、惹いて繪風彫刻の源泉となり、後世の模範となりましたのも寧ろ當然の事であります、得意とする圖樣の、枝牡丹の如きは眞に唉き亂れたる生花を見る樣であり、向獅子の圖は眞向きの顏面に頭髮を長く冠むり、腹を突き出し、前足を一本にて立たせ、後半身は小柄の裏に片切彫にて現はしたる物、又前半身だけにて、後半身のなきもありますが、其前方を睨らむ

眼光の物凄さ、實に堂々たる大作であります、又此獅子に類する馬の立模樣の小柄がありますが、之れは圖樣の關係もありますが、春日の長閑さを感ぜしむる樣に思はれます、又眠り布袋の圖は三四拜見致しましたが、皆袋を背負ひたる横模樣で、無心に眠りたる顏面には見る人をして思はず恍惚として我を忘れしむる妙があります、福祿壽の圖は雪舟の筆意に倣ふと副書がある程で、其立模樣の半身像を、其儘小柄に圖付けたもので、之れには高彫もあり、又片切彫にもあります、虎の圖は水呑虎の立位置と、二正虎喰合ひの横模樣との、二圖を見ました、水呑虎の悠揚迫らざる態度、二正虎の健闘の有樣共に得意の構圖と思はれます、馬の圖は前記の立模樣と、群馬の横位置の物があり、之れも亦高彫と、片切彫の兩樣あります、圖變りの小柄に三國誌の關羽張飛の半身の高彫。又鳥居に時鳥の

高彫があります。

獅子の圖の横模様、高彫、金色繪の物は、三所物と、揃物とを見ました、

獅子の圖の三所物は二組見ました、

又前作と思はれる裏哺金、金紋、獅子の圖の三所物は、金、銀、素銅、置金色繪、親子連れの狂るひ

又十六正獅子の圖、三所物は、金、銀、素銅、置金色繪、親子連れの狂るひ

又前作と思はれる裏哺金、金紋、獅子の圖の三所物は二組見ました、

模様、横位置の高彫で、之れは有馬家舊藏の、此作の代表品で、享保十

一年七月頃、出來致した物で、宗珉五十七歳の作であります。

宗珉が妙技を現はしたと云はれる一代の代表作は、實に有馬家舊

藏の二王の小柄、目貫であると思ひます、之れも横谷宗祐家の記錄

によりますと、享保十二年九月頃の製作とありますので、五十八歳

の作であります、赤銅、七子地の棒小柄に、素銅の置金に金色繪、二王

の半身像で、其筋肉の力のある、顔面の締まりたる、誠に名像に接す

るの觀があります、又目貫は素銅地に金色繪、立位置の目貫で、立一

寸程の像は、其傑出した鑿力で、眞に運慶の巨像の如く思はれ、殊に

驚嘆するのは、其裏は實に實に薄き銅の板で、自由に打ち出された

爲めに、片目貫は、顔面と思はれる處に、小孔を金を張り付けて、繕は

れた邊は他作に見る能はざる豪膽さが現はれて居ります、此薄金

の裏に頗る大形の丸根を付け、之れに三角形の責金をあしらつた、

豪放の半面、又此用意周到なる驚くべきものがあります、宗珉以後

の作にも、二王の圖は、世には相當多くありますが、眞に雲泥萬里の

差があつて、到底比較する勇氣も出ない程に思はれます邊は、正に

天下一品の宗珉の傑作であります、今日迄拜見致しました物より

考察しますと、小柄にては、裏哺金、金紋は前作で、棒柄、裏板金、又は裏

削金が後作に多く、銘の位置に就いても、前作の小銘の場合は、右手

の下部にあり、猶之れより、稍大銘になりても、右手にある物多く、其

後に至り、左手の下部にある物あり、享保六年作の水呑虎の小柄に
ある銘は、又右手にありますが、此頃より銘は漸次大銘となり、晩年
は大銘の儘、右手にあるを常としますが、津輕家にある三國誌の小
柄は、頗る大銘が中央にあります。
又宗珉作宗與の極め銘があります、之れは即ち無銘の物を、宗與が
極め銘を彫付けたのでありますが、之れは、小柄には裏哺金の物が
多く、中には全く後藤風の龍、又は獅子の圖にて、稍異なりたる、鏨行
きの物を見ますが概して自銘の物よりは、劣る樣に思はれます。
猶目貫に就いて申述べますと、小柄は形ちの極まりました物に、圖
を付けるので、其處に限られた窮屈はありますが、失敗は少ないの
であります、之れに反して、目貫は圖樣の全体が形ちとなりますの
で、自由ではありますが、又一層至難な物であります、宗珉が目貫に

用ひる地金は、金が最も多く、素銅、四分一等があり、寧ろ赤銅又銀は
稀なる樣に思はれます、宗珉作の目貫にて、其の非凡なる、技倆に驚
かされる物は、裏の打出しであります、故に、古來宗珉の目貫は、特に
裏を見せ度いと云はれて居ります、目貫の作は、御承知の如く、薄き
板金を、裏より打出し、表よりへし込みて、自由に高低を顯はし、表に
て肉置きを付け、象嵌、色繪等を施し、片切鏨にて線を彫り、圖樣を完
備させ、又裏には根と云ふ力金を付け、其周邊に、責金を付けるので
あります、目貫には此以外、板金を菱形、又は地紙形になし、裏を全然
打出さぬ物もあります之れを摺りかきと稱します一方出し目貫
に對する名稱であります此表に片切彫をなすのでありますが、其
四分一の菱形の周圍の頗る細い緣に、宗珉花押の美事なる、在銘の
彫り付けには、又驚かされますが、此種の目貫以外、即普通の打出し

の形式の目貫には、在銘の物が至て稀れであります、一説には、自身の目貫には、到底眞似の出來ぬ處があるので、銘はなくとも、誰にでも解かるとて豪語して、生涯目貫に銘は彫らなかつたと云ふ説も、かなり有力視せられて居りますが、是等は所謂贔負の引き倒しの説で、宗珉を大になす爲め、故意に申觸らした様に察せられます、私の考へでは、無論然ゆるが如き向上心はありましたが、夫れ程に、世を輕蔑する自尊心の強い人とは思はれないのでありますが、事實在銘は尠ないのでありまして、小柄に反して宗珉作宗與の極め短冊の入りました、良い目貫を往々拜見致します、目貫の圖様は獅子が最も多く、中に牡丹を喰はへた物もあります、一輪牡丹は名物とし て名高く、袋に入りたる布袋の圖、象の二疋連れ、二疋虎の喰合い、鯉の圖等がありますが、前記二王の圖が傑出して、一代の力作と肯かれます。

笄の作は、小柄同様、裏哺金、金紋の様式は、宗珉作宗與の極め銘の、前作と思はれる物に多く、後作即ち大銘の時代は、赤銅、七子地、色繪、高彫で、裏板金、又は裏創金が多いのであります、笄に蝙蝠の圖を見ましたが、名作でありました、圖様は殆んど小柄の圖と一致して居ります、又四分一地に片切彫した物は、往々見る處であります。

縁頭の作も、赤銅、七子地、色繪、高彫で、小銘より、稍大銘時代の、即ち前作より中年頃の作には、縁の腰の低いものが多く、此時代又四分一地の片切彫も往々見ます、晩年の大銘時代には、頗る腰の高い大形の物がありますのは、畢竟時好の關係と察せられます、此晩作も亦、赤銅、七子地、色繪、高彫を原則とする様に思はれます、高彫の圖様には、眠り布袋、虎、獅子、石橋、鶴巣籠等があります、縁頭は、殆んど、皆在銘

で、宗與の極め銘は至て少ない樣に思はれます。

鐔の作は、誠に少なく、赤銅、七子地、高彫、金色繪の物は、獅子の圖の、脇指鐔の大形の結構なる物と、其他には二三見ましたのみであります。

すが、皆眞丸形、厚手、角耳小肉の鐔であります、又四分一眞丸形式、厚手の鐔で、耳も切羽臺も、厚さの變らぬ武骨に見ゆる物に、片切彫の

ある鐔は、高彫の物よりも多く見る樣に思はれます。

元來後藤家に於きましては、鐔、緣頭の作は、鋤切羽等と共に、一般金具師の細工として賤しみ、三所物、即ち目貫、小柄、笄は腰元細工とし

て貴まれた爲め、後藤派の工匠に、腰元彫の名稱は、近年迄も殘つて居りまして、後藤本家に於きましても、自銘の鐔、又は緣頭は、十代、元祿頃の廉乘以降に見ますが、其以前の作に、德乘及程乘等の鐔を見ましたが、皆後代の極め銘でありました、宗珉も亦、後藤流の人であります。

りますので、專ら三所物の作に全力を注ぎましたと思はれ、從つて鐔、緣頭の作品は少ないかと思ひます。

其他の作品には、鏡蓋の根付、又は印籠に嵌入された丸地板、或は棹印籠等に、たまたま片切彫の物を見ますが、高彫はない樣に考へられます、宗珉の作品を通じて考へますと、高彫、片切彫共に圖樣も、鏨力も、到底他作の及ばぬ程の力がありまして、其の子弟門葉皆爭つて、同圖同形の物を作りますが、一目瞭然、月鼈雲泥の差があります事は、實に驚くべき事實でありまして、眞に名工の名に背かざる處と敬服の外ないものであります、夫れ故にこそ其作風は一世を風靡して、さしも傳統的の後藤派に對峙して、橫谷派繪風彫刻なる町彫の一派を興し、名工巨匠簇出して、爾來百有餘年、近世金工變遷期に至る迄、堂々其作風を傳へたる、又偉なりと云ふべきであります。

先輩諸說

宗珉は繪風彫刻を創始した、稀世の名匠であるりますので、先輩諸先生により傳へられた說も尠なくないので、之より其諸說の一部を掲ぐるこ共に(其註)に忌憚なき考察を加へて御參考に供します。

子爵松平賴平閣下が、刀劍會誌に、秋霜雜纂こして御掲載になりました内に、喜多村節信の筠庭雜錄より拔萃になりました數項を玆に掲げます、猶喜多村節信なる人を、調べて見ますこ、人名辭書の内に「喜多村筠居、江戸の國學者、名は節信、字は信節、通稱彦助、後に彦兵衛こ稱す、別號靜齋また靜舍、安政三年六月二十三日歿す、年七十三嬉遊笑覽の著あり」こあります。

喜多村節信曰く、近頃金工名譜こいふもの出たり、橫谷氏の家系

を引て、宗與、宗知、宗珉、こつづけて、宗珉は京師の產にて、江戸に來り、宗知が養子こなるこあるは、いたく誤れり、元祖橫谷宗與、名は守信(一云守次)京師の人、江戸に來りて、後藤殿乘光富が弟子こなる、元祿三年庚午十二月十七日身まかりぬ、世に之れを祖父宗與こ云ふ(後にも宗與ある故なり)其子宗珉はじめ宗知こいへり、名は友常、俗稱初め長次郎こいひ、後に治兵衛こいへり、薙髮し遯庵こ號す、四十歲の時(正德年中)始めて彫刻の法、一家を立て、專ら英一蝶が粉本を用ひ(草稿を一蝶に書しめたるなり)これに依りて世に繪風こ稱せらる、六十歲の時享保十八年癸丑八月六日歿せり、淺草本願寺寺中等光院に葬る、其子宗知は世を早うせるより、弟子を養子こして、是を宗與こ云ふ(祖父の名を繼しむ)祖父の宗與が時は、檜物町に拜領屋敷ありて住めり、御用を勤め、弟子も多

くありて昌へけるに、其子宗知(これ宗珉なり)出藍の能ありしが、不羈にしてたはむれ遊び、家地をも失ひ、あぶれさまよい、淺草あたりなる寺院の門番やうの者となり、薪水の役をなして居ける、宗與が弟子政次、これを尋ね出し、我家に伴ひ歸りて、諫め勸めて、家職を復さしむ、爰に於て、宗珉志を改め、憤激して工夫をこらし、古來よりの彫刻のおもむきを變へて、別に一家をなせり、是より父の宗與が弟子どもみな其の風を學びぬ、この時神田於玉が池の邊に居りしが(宗珉一度和泉橋どをりに、家よく作りて移り住しが、程もなく類燒に逢へりこそ、或云わたましの祝ひする日に、此災ありこ云ふ)又同所富山町に移り住ぬ(類燒にあへるは此轉宅の間こしらる)然るに彼金工譜にはいかに誤りてか、宗珉を京師の人とし、宗知が養子とはいへるぞ。

(註) 此說因をなして、傳を作りたるもの多きが如し、喜多村節信は天明四年の生れにして、宗珉の歿年享保十八年に後るる事五十一年なれば、確說も傳はり居りしならんこ察せらるれども、四十歳より彫法を改めたりこあれども、寶永五年の年號付の緣頭は即ち三十九歳の作にして、既に横谷流、繪風の圖樣なれば、此說一考を要すべきかこ思ひます、又歿年は六十四歳にして六十歳は誤り、又菩提所は等光寺にして等光院は誤りであります。

『筠庭雜錄』世に名高き、宗珉の金剛神の目貫は、殊に心を用ひて作れるにや、晩年のこことなりしかば、駕籠にかかれて、度々淺草寺、また感應寺など、處々の金剛神を見ありきしこなり、目貫は銅にて、金のいろるしたるなり世に只二具あるのみ、一は有馬侯の珍藏こなり、一はいづくへか行たるを、しらでありしが、あるおや船

の船頭が手に入れて、誰が作ともしらずして、舟玉の神像を收めたる、小さき厨子の戸びらに付てむと思ひて、佛師のもとへもてあつらへける、其頃歌舞伎役者中村七三郎少長、折ふし佛師のもとに來りて、其目貫のよの常ならぬを見て、深く惜み、宗與が行てあつらへける、其頃歌舞伎役者中村七三郎少長、折ふし佛師のもとに來りて、其目貫のよの常ならぬを見て、深く惜み、宗與が子なる傳三郎は知己なれば、やがて此事告て、行て見せしむるに、果して宗珉が眞作なりければ、傳三郎是を、新材木町山形屋某と云へる材木屋、もとより刀劍の小道具好みける者故に物語り、勸めて買はしめたりとなむ、さきに有馬侯聞及ばれ、所藏の目貫と大小一具とせむとおぼして、高價に求めむとのことなりしかど、山形屋秘置て售らざりしと云、されど是をよく見し人のいへるは有馬侯のは勝れて、山形屋なるは次なりとなり。

（註）有馬侯の舊藏二王目貫は、前記の享保十二年、五十八歲の作で、實に宗珉一代傑作中の壓卷であり、又其圖付に就ても、全國を行脚して、二王尊の像を見て、運慶の作を模したと云ふ傳說もあります、又傳三郎とあるは、後宗與の二男であります。

『筠庭雜錄』宗珉が姉は富豪の聞へありし冬木といへる商家へ嫁せり、宗珉この冬木より借財せし事有て、その償ひに彫刻をなして贈れり、毛彫多かりしとぞ、故に後代までも、あまた所持ありしが、それも今は散失したりとなむ。

又宗珉がむかし、宗知といひし時、作れる物も多かるべけれども、人しらざるは、其頃迄は、後藤の家風にして、いはゆる作風なれば、名などは絕てしるす事なかりしなり。

『筠庭雜錄』宗珉、遯庵は下戶にて煎茶を好めり、又煙草を吸ふに烟管のらうは葭莖を用ひて、一度吸たるをば取替て捨たり、年老

ては臥具は常に、釣夜着を用ゆ、是も手輕き仕方なりこそ、性質すこし氣儘なるかたなりと、直政(柳川)が妻の物がたりなり(夜中ねざめに茶を煮さすること往々有しなどいへり)されど一蝶が母が作れる物、世に名高きが多く、一輪牡丹は肉を飽まで高くして、を十二年が間養ひたる友義最賞すべし、又喜多村節信曰く、宗珉手づよく打出したれば、その高低の間地がねいたく薄く、花辨ち人の用意にや、一具燒がねの金目貫なり(中略)宗珉花押とあり。ぎれなむと恐るる程なれば、裏より脂つめて固めたり、所藏せる喜多村節信曰く、宗珉が許に給仕せし女、後柳川直政が妻となる(三河島農家の女也)それが物語に、宗珉は痩がたちしてよき男也、こいへり。

『筠庭雜錄』　宗珉作淺妻舟の小柄、喜多村節信の曰く、世に名高き横谷宗珉の作、淺妻舟の小柄は、すべて銀の四分一がねにて、表は人の知たる、柳の蔭に遊女舟に乘たる圖、裏は四分一がねに金と銀と二筋斜に入たる上に、彼小歌を毛彫にしたり、是も一蝶が書きしなるべし。

小柄裏に「あたしあた波よせてはかへるなみ朝妻舟の淺ましやアヽまたの日はたれに契をかはして色を枕はつかし僞かちの我とこの山よしそれとても世の中、北窓翁英一蝶圖」とあり。

(註)　以上松平子爵閣下、御研究の一部であります、之れに因り、宗珉の風采、又性情の片鱗も窺はれる樣に思はれます、又前記淺妻舟の小柄は、古來有名な物でありますが、私は未見であります、聞く處によりますと、表も片切彫との事であります。

是より秋山久作先生が、刀劍會誌に揭載の雜感一束中の宗珉に關

する説の内、數項を左に掲げます。

一、物は博く見ぬと迷路に入り安い物である、曾て宗珉の夷の畫幅を得たが、如何樣見ても、通常畫工の筆でない、其人の氣性が顯はれて居て、正物で有らうと信ぜらるるが、然るに其花押は彫刻物に見る花押とは全然違つて居る、元祿丙子年十月と有るから、元祿九年の畫らしい、宗珉の二十八九歳の頃なる可し、若き時には、斯の如く異る花押も用いた物と見える。

一、宗與の上出來と云ふ虎を彫た緣頭を見て、石の出る程欲敷思うたが、宗珉の虎の緣が出て、之と見くらべて見ると、恰も旭の光に出逢たる燈火の如く、忽ち光を失ふて、比較物にならぬ、宗與より疎なる象嵌、少なき鏨が見へて居る程、力があつて、品位が高く見へる、實に名人の作と云ふ物は妙だ、爰らが所謂弟子は師に及ばずと云ふ處であらふ。

一、横谷宗珉の大家たる事は、今更言ふ迄もないが、同作には、好き嫌いの有る作柄と聞く、肉彫、毛彫共に誠に見事なる作にて、世に神品なりと許す物ありとならば、此作こそ神品なる可し、同作に對して氣の付く點は、第一魚子の蒔き方の異つて居る、第二肉彫の肉合は高く見ゆれ共然も据り方が深く、小柄、緣頭、其物に喰入て居る樣に見ゑる、第三鏨痕は肉太く、無頓着無造作に彫はなつと云ふ体であるが、其内に自然嚴然たる、規矩の含まれ居るは、至妙敬服である、概言すれば一點一劃の鏨と雖も、苟も下ださざる的の物と見ゑて、一品を見る毎に、尊重愛撫の念が增起する、毛彫物に至つても、亦大同小異で、之には鏨痕の廣狹、淺深に一種の趣味が含蓄して居るが、片切彫の創始者と云ふが、他作の如く幅廣か

らず、細見すれば、他に異る物である、銘にも通常の物と、小銘と唱ふる物との、二様がありて、此の小銘と唱ふる物には種々異る説もある様子なるが、説の取捨は、後日の沙汰として、兎も角右二様の銘振共に、鏨の強健に似ず、筆法は柔也、野翁の見る處、未だ多からざるが故か、之を同一作とすれば、小銘より大銘に移る、否改まりたる其年代を分ち知るは同作に對する至難の一事なる可し、小柄の裏板の鑢に一見亂れたるが如き物あり、之も細見し來れば、此作の特徴にして、他の僞作者の眞似得ざるの一事である。

一、田中一賀齋の舟中話中に「此二十年以前迄御大名より後藤十二代はある故、宗珉の三所物高彫類何にてもこの御吟味ありしに、江戸中漸く小柄一本、目貫一具あり、取合はせても、笄はなし、一色の値を聞くに七十兩に賣らぬ由、段々と吟味して、三百兩にて三

所物出でし由、是を思へば一枚も極めの付かぬ物で、高金に成るは能々似せのならぬ物と見るたり、其後何時ともなく、宗珉の細工段々と出、獅子は申に及ばず、金紋庭鳥、其外色繪、或は龍虎、斑入の虎抔御望次第、値段にまかせ澤山あるは不思議な事なり」云々とあり、此意は宗珉作は如此少なき物なりしに、需用の多くなるに從がつて、俄に多く出でたるは僞物であると云ふのであらうか、又は宗珉の如き大家でも一時は後藤の勢には壓せられて極めの一枚も付かず、日陰者になつて居たと解すべきであらうか、爰で一つ宗珉の境遇を考ふるも亦面白い、養父宗與は後藤家の弟子より一派を立て、其養子宗珉に至つて、下書まで狩野家より出でたる英一蝶の下書を用ひて、遂に目的を達したる成功家にして、一蝶が流罪中は其母親を貰ぎ養ひたるなど、中々義俠心、に

富んで居た人らしいで、後藤全盛の世には可なりに忌憚に觸れたる事でありつらん、今日ならば角袖で尾行せらるる人物ならん、然しながら同作も高彫物は後藤作に奪はれたるも多かるべく、所持する人も不流行物なれば無頓着に觀過したる様の事もありつらん、宗珉の死後門地門閥に拘泥せざる公平なる鑑識者の力により、風雪に壓せられたる花樹の春色を發するが如く、漸く壓迫もやみ、需用者も多く、價も亦高くなりて潜伏品も僞物と共に、世に顯はれ出でたる事にはあらざるか。

(註) 田中一賀齋は金工鐔寄の著者にして其序文に天保十年七十六翁とあれば明和元年の生れなり。

一、片切彫は宗珉の創始と云ふが、此人の片切彫は他作の如く鏨幅が廣くない物が多い、心を用ひて見ざれば氣付かぬ底の物であ

る、片切彫は宗與等より肉幅が廣くなつて居る、是は宗珉の創始と云うて行はるるより、殊に之を顯はさんと心を用ひたるなどと云ふ事もある可し、廣くなつたで品格が下つた様也、又同作の動物は瞳の入れ様に注意の足らざる點あるが、從令ば鐘馗が鬼を摑んで居る模様などには、双方の眼配の釣合が付かぬ物もあるが、そこは宗珉と來ると妙だ、此一點の瞳の入れ様で、全体の活氣が全局面に起つて來て一點のすきが見えず。

(註) 秋山先生の説は以上を以て終はりとします、中々有益な御考察もありまして、面白い御話であります、之より桑原羊次郎先生多年御研究の中より、左の數項を抜萃して茲に掲げます。

一(平象嵌毛彫の始めは誰なりや)の項中

横谷宗珉絶代の手腕を振うて、片切彫を創意し、實に元祿年間、裝

劒彫金界の粋美を盡せしと雖も、從來素毛彫のみを試み、曾て平象嵌を試みしことなしと傳說せられたり、然るに、此の傳說は夏雄翁が歿故少時前に得られたる、朧銀製平象嵌、波に千鳥の緣によりて、其の虛妄たるを明かにせり、之に據りて又予が嘗て聞く處の京師某家珍藏、平象嵌、人物、小柄、笄、宗珉作の眞物なる可きを想像せしむ(下略)

一(彫金工と下繪師)の項中

彫金術と、之が下繪なるものは、誠に密接なる關係を有するものにして、鳥の双翼、車の兩輪の如く、決して其の一を缺く可からず、彫金の術は如何に精緻巧妙なりと雖ども、其下繪にして、嶄新珍寄ならずんば、決して名品完作をなすこと能はず、之と等しく、其の下繪は如何に奇想妙案よりなると雖ども、之が彫刻術拙劣なるときは、遂に能く精巧優美の製作をなすこと能はざるなり、是を以て古來名工上手と稱せらるゝ者は、獨り其下繪に種々の新圖を案出し、以て能く高尙優美の名品を製作せしにあらざるはなし(中略)

横谷宗珉と英一蝶、横谷宗珉が後藤氏の規矩を脫離して別に一派の新意を工夫し、所謂繪風、町彫なるものを創意し、巨然として一家をなせしの際、繪畫界の奇傑英一蝶の筆力自在にして、師授繩墨の外に奔放するあり、彼是提携して、彫金繪畫兩界に一大飛躍を試みしは、誠に元祿年間の一大奇觀なりと云ふ可し、而して此の兩者間の交情は實に世の嘖々として賞讃する所なり、今其の一例を擧ぐれば、元祿十一年一蝶未だ潮湖と稱せし時、幕府の忌憚に觸れ、罪を獲て三宅島に流さるゝや、一蝶固と其の母妙壽

に至孝なり、流謫の日、侍養人なきを悲み、友人横谷宗珉に托して、視膳せしむ、其の後寶永六年、一蝶赦に遇ふの日に至る迄で、實に十有二年間、宗珉之に奉仕すること、其の所生に過ぎたりと云ふ、斯の如く此の二巨人の交情は、父子兄弟の如くなりしを以て、宗珉の作る所多くは一蝶の筆意に出づと云ふ、故に其の下繪嶄新奇絶にして、祐乘以來眞に比儔なきに至れり、而して宗珉の下繪に就きて更に論ずべきは、其の一蝶風下繪は、多くは中年より晩年の作にして、壯年の作に於ては、純粹の狩野風なること是なり、蓋し壯年彫時代に於ては、一蝶壯年の畫風(狩野風)によりしものか、或は又安信、其の他、狩野氏の粉本によりしものか、抑も又宗珉渠れ自身が狩野家に學びしかは、予の未だ研究せざる所なり、兎に角に宗珉作品中、前後二樣の下繪あることを知るは、鑑定上注意を要することならんと思考するなり。

一(彫金界の一大奇工)の項中

横谷宗珉亦た彫金界の傑物なり、繪風彫、即ち今日所謂町彫の祖にして、片切彫に於ては空前絶後の大家たり、宗珉の最も高評を博せしは、當時天下の豪商、紀伊國屋文左衛門の需により、製作せし一輪牡丹の目貫にして、宗珉が此の製作に當つてや、机上の小花瓶、毎に一朶の牡丹を挿入し、實寫的に之を彫鐫せしを以て、世人をして、一見其の巧妙を三嘆せしめたりと云ふ、其他、花卉、鳥獣、魚介の微に至る迄で、其遺品に就きて、熟ら此工の手腕を察するに到底凡工の企及す可からざる妙所ありて、祐乘以來眞に比儔なき所、之を稱世の名人と稱するは則ち可なり。

(註) 以上は桑原先生御發表の一部であります、眞に妙諦を得たる

御研究には毎度敬服する處であります、前項に掲載の横谷家系も亦同先生御研究の跡に因りましたもので、又後項に掲げます銘彫の順序に就き貴重の御發表もあり、其他にも此稿をかきますに付き種々參考になりました事を玆に開陳し、此機會に感謝の意を表し度いと思ひます。

傳說考察

是より私が聞及びました傳說を二三掲げますと共に其考察を申述べ樣と思ひます、先づ横谷宗珉の出現が、如何に傳統的、金工界の中樞とも云ふべき、後藤本家に反映したかと云ふ事に就きまして、次の如き傳說があります、後藤家十代廉乘が、寛文二年江戸定府の命を蒙り、京都より移住致しましたが、嫡子源四郎光嘉壯年にて歿せしを以て、同苗仙乘の三男光壽を撰みて家嗣とし、元祿十三年に家督を讓り、光壽が十一代となりましたが、養父廉乘と不和合に依り、傳來の秘事を受けませんでしたが、「生得器用の人なれば終に一風を現し、名譽を得たり、俗に通乘風と云ふて、町彫、繪風に似たる處あり、時の好敵手、横谷宗珉の彫風を加味して、後藤家に一種の風格を作りし事は、此人即ち通乘光壽の獨創なり、故に後藤歷代中の三作として、祐、光、即と稱し、或は祐乘を拔け者として、光、即、通と稱する程なれば家傳秘事相傳の如何にかゝわらず、義父廉乘よりは、優りたる名工なれば、決して之を輕ずべからざるなり」と桑原氏も述べられて居ります、通乘の歿年は、享保六年で享年五十九歳とありますので、寛文三年の生れで、宗珉に長ずる事七歳であります、其の廉乘の養子となりましたのは、貞享二年で通乘二十三歳の時であ

りました、之は貞享元年に廉乗の一子光嘉が、二十九歳で夭折した結果でありますが、傳說は之より初まつたのであります、後藤廉乗が一子早世の爲め、養嗣子を撰むに就きましては、本家相續者の資格に就き、別家、分家の內にても、重き家柄を必要としましのは、其の當時の時勢としては、當然の事と思はれますが、當時町彫に宗珉が現はれた爲め、破格の仙乗三男光壽を選定したと云ふのでありますが、光壽が養嗣子になりました事は、或は破格でありましたかも知れませぬが、夫れは宗珉の爲めにではなく、將來の見込あるもの、こしてゞあらうと、考へられるのであります、何となれば光壽が養子となりました貞享二年には猶祖父宗與の存生中で、後藤萬能の時代で、宗珉が繪風彫刻、創始以前なる故でありますが、此の傳說は昔より、かなり有力のものでありました、又廉乗、通乗、不和合に就き

ましても、町彫に宗珉出現の爲め、通乗が家格を破り、傳統以外のものを製作した結果と云ふ傳說も相當有力視せられて居りますが、通乗も破格に推選されて本家相續する程の人材でありますので、傳統的の後藤家の彫刻が、時勢に適合せぬ位の事の解らぬ人ではないと思はれますので、宗珉出現の反映と見るよりも寧ろ時勢の影響と解する方が、適當の樣に考へられます、殊に宗珉より數年の年長者でありますので此解釋が最も正確かと思ひます、此時勢に適合する樣に苦心しながらも、猶半面傳統的の彫法を固守して、晩年には一大名匠宗珉と對峙し、猶後藤の傳統を後世に遺しました功績は偉なりと云ふべきでありますが、當時としては、養父の忌諱に觸れて、不和合になりましたのも、亦已むを得ぬ事の樣に考へられます。

又傳說として、最も名高きは、一蝶が罪を得て、三宅島に流謫の日、其母を宗珉に託し、島に居る事十二年、赦に遇ひて、歸る迄宗珉之に仕へて、其所生に過ぎたりとありますが、前にも述べました如く、一蝶が島に行きましたのは、四十七歳で元祿十一年(宗珉二十九歳)赦に遇ひて歸りましたのは、五十八歳、寶永六年(宗珉四十歳)であります、母子の年齡の差は種々で一定致しませんが、長子としても、二十歳位の差のありますのは、當然の事と思はれます、假りに一蝶よりも、二十歳の年長者とすれば、流謫の日は六十七歳、歸りたる時は七十八歳となりますので、強がち否認する譯もないのでありますが、現今のやうに、醫術、衛生狀態の完備しない時代、江戸に於きましては、五十二三歳で、病歿した人さへも、猶彼の人も五十歳以上で病死し、たので、遺憾はないであらうと評された例もありますので、何とな

く信じられぬ樣に思はれるのであります、之れは、私の考察では、宗珉が父に對する至孝と、其厚き友情とが、誤り傳へられたのではないかと思はれます、殊に前項にある、喜多村節信の說中、宗珉は、父の死後遊蕩兒となり、爲めに家地を失ひ、果ては寺の門番と迄成下りたるを、柳川政次の意見にて改心し、四十歳より繪風彫刻を創意したとありますが、之に據りますと、一蝶の母を養ひましたのは、遊蕩流浪中に當りますので、兩說に矛盾がある樣に思はれます、德川幕府の基礎漸く固まり、世は泰平を謳ふの元祿以後、奢侈遊蕩の風が一世を風靡した時代に於きましては、吉原遊廓の全盛は目を驚かすものがあり、大名は申すに及ばず、旗下八萬騎、乃至有德の町人、町奴に至る迄、猫も、杓子も、吉原を知らねば、人の交はりが出來ぬ樣に心得た時代で、殊に廓內では、士民平等でありましたので、誰も悅ん

で出懸けたもので、又一の交際場裡として、名を一世に揚げんとした人の、金錢を惜しまず浪費した事も想像に難くありません、宗珉も亦新機軸を、世に遺したる程の人物、奈邊の消息に暗い人ではなく、殊に紀文の如き、豪商とも交渉がありましたので、晩年此交際場裡に出入した事が、遊蕩兒の如く、誤傳された様にも思はれますので、此邊猶研究を要する様に考へられます。

又英一蝶が、三宅島に流謫中、人に託して、宗珉が其の起居を尋ねまで、宗珉は狂喜して、毎日魚河岸に行き、遂に其の印しのある干魚を發見して、大に悦び、早速、一具の目貫に干物の、表裏を彫刻し、朝夕之を見付けなば、一蝶の作りたるものと思はれよ、とありましたの物した返答に、至極健康にて干魚を作り居る、此の如き印しのある干れを見て、友を偲び、心を慰めたと云ふ傳説もありますが、之も亦宗

珉の友情の厚きを證する浮説の様に思はれるのでありますが、即ち此干魚の目貫と云はれる、後藤清乗の證明書、及一蝶の島よりの手紙と、又宗珉の發句の短冊が添つて居り、其の上に後藤一乗作赤銅淺妻舟の鐔が添へられてある、名物と傳へられる目貫がありまず。

其他種々なる傳説は數多くありますが、其多くは宗珉には、頗る迷惑な、所謂贔負の引倒し的のものでありますので、略します

作品寫眞　附銘振變遷

宗珉の作品を寫眞を以て御紹介致すに當り、其銘振りの變遷をも併せて、御注意を願はんと思ひまして、茲に小銘より、大銘に至る、順序を以て、左に羅列致しました、併しながら、之れは私の知れる範圍

に於て、研究致しましたので、宗珉一生涯の全般に渉るものではなく、勿論宗珉一代の作品を、悉く一見したる次第ではないので、只僅かに私の知れる限りの、小部分に過ぎず、殊に又參考と、なるべき、其の内の一部の寫眞を掲載致しましたので、故に同銘、同圖、同樣の物は、其の内の一品を撰み掲載致した次第でありますので、此寫眞以外、世上には猶幾多の名品が存在する事は論を俟たぬ譯でありま す、猶作品の前後の順序を極めますに就きましても、年號名を彫りてある物は、僅かに寶永五年の頭の小緣に有るのみにて、他は横付谷宗祐の家の記錄にある二三點に過ぎませんが、之れを羅針盤と して、比較研究し、其の推定の結果の、發表に過ぎませんので、前後誤りたる物も、少なくない樣に思はれます、幸に大方各位の、斧正により、他日完成の前提ともなるを得ば、幸甚之れに過ぐるものはないと考へて居ります。

宗珉の繪風彫刻を、創始したるは、前項にも述べたる如く、凡そ三十歳前後よりと、考へられますが、其の以前の作とも思はれる、後藤風の、作品は皆、無銘なるべきが故に、見たる事ありても、正確に判別する事は、頗る難き事と思はれます、世上往々、宗珉作宗與極め銘の物に、後藤風にて稍整行の、器用な物がありますが、猶研究の餘地ある樣に考へられます、又祖父宗與の作品にも、自身銘の物は、殆んど見ない樣に思はれますので、其の作風を探る事も亦不可能の樣に考へられます、故に茲には、繪風彫刻創始以後と肯かれる物のみの、寫眞を掲げる事に致しました、相見香雨君の好意に由り、昨年日本美術協會藏書である、横谷家に傳へられた、宗珉の下畫帳を一覽致しました、下畫帳は全部で五冊ありまして、之れを桐箱に納めてあり

ます、其の挿蓋の表に「藁圖英一蝶畵　横谷宗珉藏」と墨書し、同裏に「萬延元庚申歳次霜月日　小林氏所藏」とあります、熟覽致しましたが、其の内の二冊は同時に出來たものと之れを、一、二とし、他の三冊は逐次作り足されたる樣に思はれまで

すのは、形狀大さに相異があります、内容は一の巻に一蝶の畵、半紙判半枚程の紙に「馬に人物」「浪」「竹に菊」「鐘馗」「猩々」の五枚があり、二の巻に「鶴の畵」大形鐔の下畵に英一蝶筆とあり、三の巻に「河津股野」と「馬」の畵の一蝶筆があります、一蝶の畵は、之れだけでありまして、他は普通見る處の、彫刻師の下畵帳同樣、鐔、小柄、縁頭、目貫等の彫刻作品の大さの通りに、美事に書かれ、誠に横谷家傳來と肯かれますのは、其全部の畵風は、横谷家小道具に見る處と一致致して居りまして、其内の大多數は宗珉又は宗與の、既製作品を複寫した物で、夫れには其の複寫の年月の記入があります、其の記入の年號は、享保

五年を最古とし、寶暦、明和、安永、延享、寛延等の年號があり、又既製品複寫の内には、安親、乘意、光孝、柳川直政、長州友直、若芝等の作品もあります、其内の孰れが宗珉自身の下畵であるかを識別する事は頗る難事でありますが、大多數は其子孫に由り模寫貼付された樣に思はれます、茲に掲載の寫眞の物も亦此複寫下畵の内にあります物が多いので夫れにある物は特に寫眞の脇に、下畵帳所載の旨を記入する事に致しました。

此下畵帳の繪は頗る精密に且頗る叮嚀に畵いてありまして一見實物を考察する事の出來るものであります、如何に古人が其處に細心の注意を拂はれたかを察するに足るもので感服の外ないものであります、今日作品に乏しく思ひます鐔の下畵は相當澤山にありますが、最も之れは獨り宗珉の作品のみではなく宗與の作品

も混同して居りますので且其下書の一々に銘を書してないので判別致し兼ますが中には到底横谷家の作品にはあるまいと思はれる物も掲げられて居ります。富士に三保松原に浪のある圖は片切彫と肯かれ脇書に銀とあり、又行年六十四歳宗珉在銘の様に記されてあります、即其歿年の作品でありますが之れは全然後藤末代の作品と圖様も一致し又鏨行の豪放なる獨特味もない様に思はれますのは或は病中の作とでも云ふ譯でありますか。又探幽圖唐人物小柄に遯庵宗珉と大銘のある物もありましたが他日實物を一見致したい様に思ひます、珍らしい物に全然後藤作と思はれる牡丹の小柄に寶暦十年十月十五日祖父宗與作相極めと脇書にあります之れは寶暦とありますので宗與が祖父宗與作の極めを致したものと思はれます。

宗珉在銘（小銘）

宗珉在銘（小銘）

四分一片切彫野馬圖小柄（下畫帳）四の冊所載其脇書に子昂圖とあれば初期には探幽以外の圖様も模したろならんと思はれます、同圖金無垢小柄某家にあり、鏨行の巧妙なる各馬の活動賞讃すべきであります。

四分一七子地高彫象嵌色絵向獅子圖小柄
下畫帖三の冊に下絵あれども其下畫は笄の圖の如く思はれます。
此圖得意と見へ生涯多數作りたる如し、小銘の初期此傑作あるは亦偉なりと推賞すべきであります。

六〇

宗珉在銘（小銘）

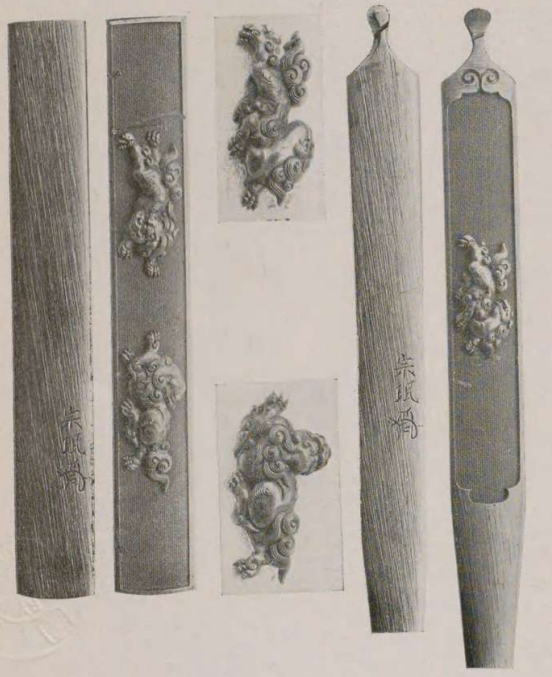
四分一片切彫傘鐘馗圖小柄
下畫帖五の冊に下繪あり。
狩野家の繪によりたる圖様にて傘の上に鬼の隠れたる頗る面白く又先生得意の作と思はれます。

宗珉在銘（小銘）

四分一片切彫達摩圖小柄
下畫帖五の冊に此下繪があります。
狩野家の繪に見る圖様、片切の堅力又見るべきであります。

宗珉在銘（小銘）

四分一裏創金片切彫大森彦七圖小柄
下畫帖四の冊に此下繪がありますが只月の位置相異があります。
之れも狩野家の繪によりたると思はれますが珍圖であります。

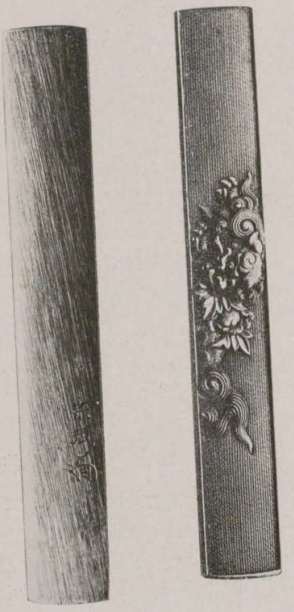


宗珉在銘（小銘と大銘の中間銘）

裏吹金、赤銅七子地金紋獅子圖三所物

繪風彫刻の風格を備へたる物、同圖同型の三所某家にあり。

宗珉在銘（前同様中間銘）

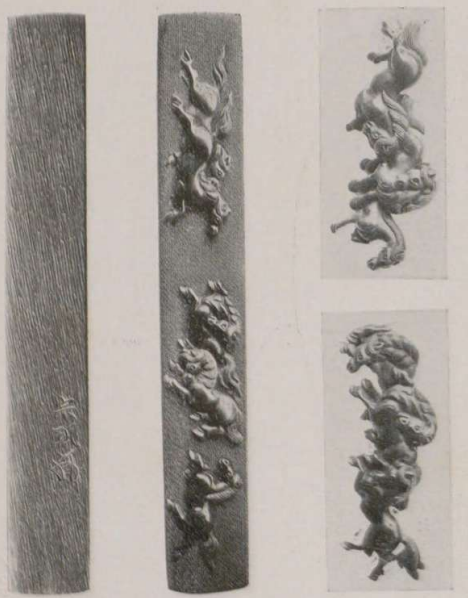


裏吊金四分一七子地高彫象嵌色繪牡丹唐獅子圖小柄及金無垢獅子圖目貫。

下畫帖二の冊に此小柄の下畫があり夫れは棒小柄であります。

此圖も得意の物他にも同圖の晩作あり其躍動の有様見るべきであります。

宗珉在銘



赤銅、裏板金、七子地、高彫、色繪、群れ馬圖小柄目貫。

有馬家舊藏の逸品各馬の活動見るべきであります。

寶永五戊子仲夏

宗珉作之在銘（三十九歳の作）

擴大銘

赤銅、小緣金、七子地、高彫、色繪獅子圖頭
繪風彫刻の風格備はりたる狂ふひ獅子の躍動
見るべきものがあります。

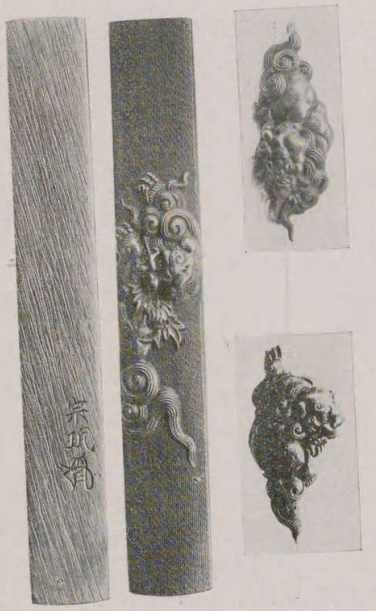
宗珉在銘（裏に模様ある爲め特に小銘に切りたるか）

赤銅、裏削金、七子地、高彫、金色繪、向獅子圖小柄裏は金象嵌。
下畵帖四の冊に此下繪とおぼしきものあり只銘字の位置に相異あり。
前揭小銘時代と全然同樣にて只斑象嵌に對しこれは全身金色繪なる爲め一層立派に見ゆ。

宗珉在銘

四分一、片切彫、傘人物圖小柄。
下畵帖四の冊に此下繪があります。
眞に英一蝶下畵と肯かるゝ瓢逸なる構圖頗る面白し。

宗珉在銘



赤銅、裏板金、七子地、高彫、金色繪牡丹唵獅子圖三所物、目貫は金無垢。

此圖誠に横谷家彫刻代表的の圖案なり後藤家の龍に對し此獅子の圖を代表に選みしが如し。

宗珉在銘

赤銅、裏板金、七子地、高彫、色繪、立馬圖小柄。

下畫帖三の冊に此下繪あり。

此馬の圖は雪舟の繪に由り作りたる如くにて曾て夏雄翁垂涎萬丈物。

宗珉在銘

四分一、裏削金、片切彫、龍虎圖、小柄。

下畫帖四の冊に下繪あり。

宗珉在銘

赤銅、裏板金、七子地、高彫、色繪、仁王圖小柄。

之れは後にあります有馬家舊藏の名物と全然同様でありまして此方が以前に出來ました様に思はれます。

宗珉在銘

赤銅、裏削金、片切彫、福祿壽圖小柄。

下畫帖一の冊、三の冊に此圖がありますが下畫には高彫とも片切彫とも記されて居りませんので何れが此小柄の下畫であるかは不明でありますが雪舟の繪により構圖したるもので同様の小柄數多あります。

宗珉在銘

四分一、丸形、片切彫、福祿壽、鶴、裏、松、鹿、圖、鐔。

下畫帖三の冊に下繪あり。

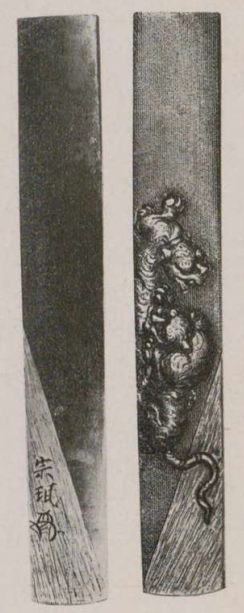
宗珉在銘

裏哺金、銀、片切彫、獅子舞圖小柄。
下畵帖四の冊に圓圖にて異れる點ある物あり
共脇書に正德年中出來明和八辛卯四月九日寫
留置とあり猶一蝶圖此下畵有り見合可申事と
あり何の意味でありますか思ふに之れに因り
考へますと多少圖を變じて作りましたかと思
はれます。
英一蝶の下畵に由りたると背かれ共圖樣の面
目躍如たるものがあります。
表銘と銀地板の裏哺金は珍らしき物でありま
す。

宗珉在銘

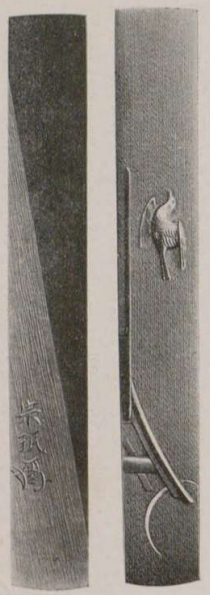
赤銅、刨金、七子地、四分一紋、
高彫、蝙蝠圖笄。

宗珉在銘



表四分一、七子地、裏赤銅、表裏共、刨金、
高彫、色繪、二疋虎喰合圖小柄。
二疋虎活躍凄慘の氣に滿ちたる物、同圖の物
他にもあり又之れと對になる目貫某家にあり。

宗珉在銘



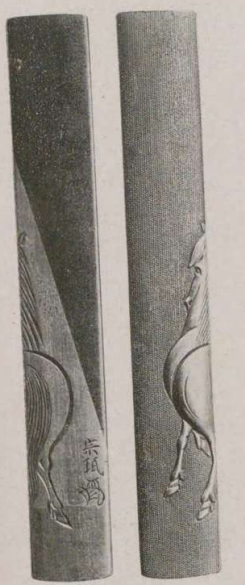
赤銅、裏刨金、七子地、高彫、色繪、月時鳥
圖小柄。
此圖同作中の珍物であります頓政の歌意に據
りたる物と思はれます。

宗珉在銘

（愈大銘の晩作の部に入る）

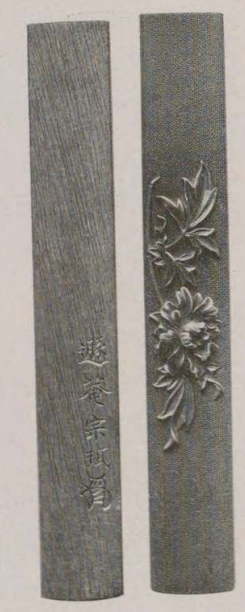
四分一、片切彫、眠り布袋圖小柄。
下畫帖四の冊に此下繪ありますが只下繪には杖がありません。
探幽の繪に據りたる如し、無心に眠りたる表情眞に入神の技と云ふべきであります。

宗珉在銘



赤銅、裏削金、七子地、高彫、金色繪、立馬圖小柄裏は片切彫。
雪舟の繪に據りたる構圖にて裏に續きたる圖樣面白く苦心歷然として美事成功したる圖であります。

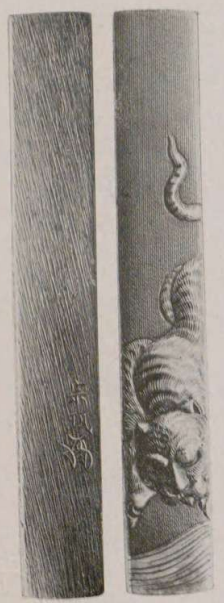
遯庵宗珉在銘



赤銅、裏板金、七子地、高彫、色繪、枝牡丹圖小柄。
下畫帖二の冊に此小柄の下繪があります。
之れも亦最も得意の圖で生花の活氣を見るべきであります他に二三同樣の物がありますが遯庵銘は眞に珍らしく他に片切彫の物に一品見たる事あるのみであります。

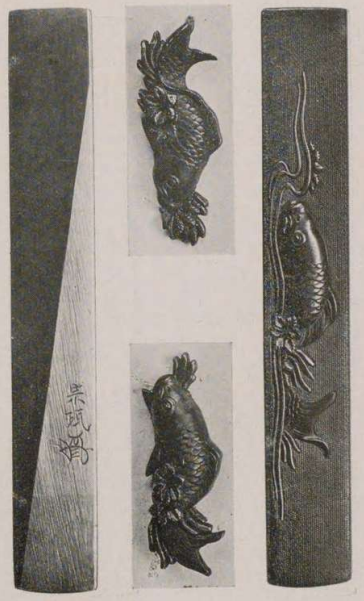
宗珉在銘

（宗祐家の記錄に享保六年四月頃出來とありますので五十二歲の作であります）



赤銅、裏板金、七子地、高彫、色繪、水呑虎圖小柄。
下畫帖二の冊、四の冊に下繪あり二の冊の方は水に相異あれば四の冊の方此下繪かと思はれます。
狩野家の下繪に由りたる如く悠揚迫らざる態度頗面白く思はれます。

宗珉在銘

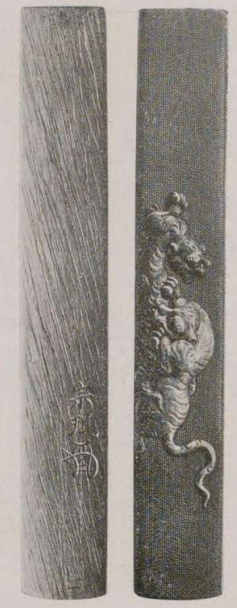


四分一、裏板赤銅削金、七子地、高彫、色繪、水に鯉小柄目貫。

下畫帖一の冊に此二所の下繪があり夫れの小柄は小絲をとりたる裏哺でありますが外に棒柄の同圖もありますが夫れは藻に相異があります。

此圖又珍らしきが如く桂永壽が模造したる物を見ました。

宗珉在銘

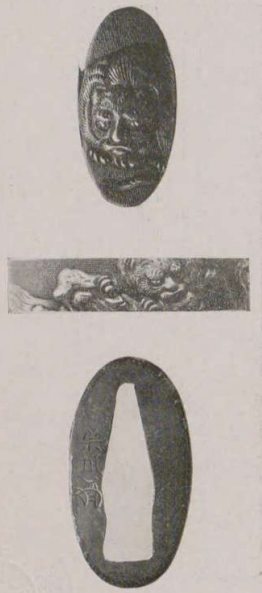


赤銅、裏板金、七子地、高彫、色繪、二疋虎喰合圖小柄。

下畫帖四の冊に下繪あり。

前掲の同圖は津輕家藏にして之れは佐竹家に傳はりたる物、地金と虎の配色に相異あるのみにて全然同様の物であります。

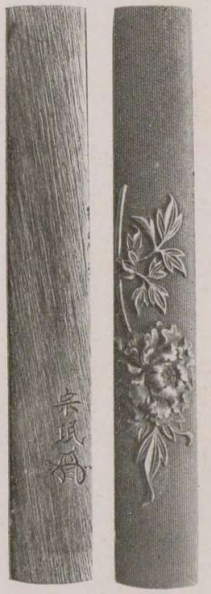
宗珉在銘



赤銅、七子地、高彫、色繪、虎圖縁頭。

一疋は靜、一疋は動の有様を現はしたる圖付け見るべきであります。

宗珉在銘



赤銅、裏板金、七子地、高彫、色繪、枝牡丹圖小柄。
前掲と同圖にて稍戸尻によりたる圖付け面白し。

宗珉在銘

赤銅、裏板金、七子地、高彫、色繪、馬圖小柄。
下書帖四の冊に此下繪と同圖三あり、其内の一に赤銅裏四分一金削襖の脇書あれば他に猶同圖の小柄あると思はれます。
蜂須賀家舊藏の逸品にて前掲と同圖にて色繪の配色に異りたる處あり。

宗珉在銘

赤銅、裏板金、七子地、高彫、色繪、眠り布袋圖小柄目貫、目貫銅色繪。
下書帖一の冊に此圖あり雪舟書とありて小柄に小緣あれば裏哺の下繪なれども此圖の小柄は皆棒柄なり目貫一の冊は異なれり五の冊に稍似たる圖あれども杖の位置に相異あり。
此圖又得意の物にて同圖の小柄四本あり此柄同樣銅の顏に金の袋二本有、他は四分一の顏にて其内の一は小銘でありますが又宗與を初め一門中にて模造した物も數多あります。

宗珉在銘（上に雪舟圖とあり）

赤銅、裏板金、七子地、高彫、色繪、福祿壽圖小柄。

下書帖四の冊に下繪があり脇書に享保七壬寅正月とあります製作の年月かと思はれます。

此圖前掲片切彫と同圖にて高彫であります猶他にも同圖がある様に思はれます。

宗珉在銘

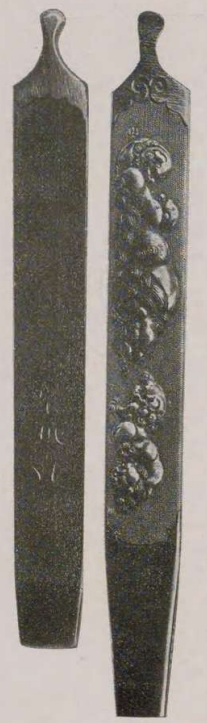
赤銅、裏板金、七子地、高彫、色繪、枝牡丹圖小柄。

之れも亦前掲の物と全然同様でありますが銘振りに由り晩作の様に思はれます。

宗珉在銘

赤銅、裏創金、七子地、高彫、金色繪向獅子圖小柄。

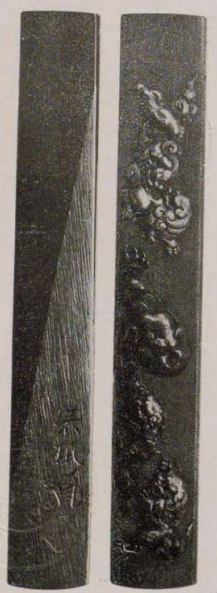
之れは前掲と同圖にて銀の牡丹花をくはへたる圖で名品であります。



宗珉在銘（宗祐の記錄に享保十一年七月頃出來とありますので五十七歳の作であります）

赤銅、裏創金、七子地、高彫、色繪、十六足獅子圖三所物。

有馬家舊藏の逸品、田中一賀も其金工鐔寄に所載の物で眞に一代の大作であります。



宗珉在銘

赤銅、七子地、高彫、色繪石橋圖縁頭。
石橋の圖にて獅子を彫らぬ處頗面白く
之れも有馬家舊藏なれば前掲十六疋獅
子三所と揃ひたる物の様に思はれます。

宗珉在銘

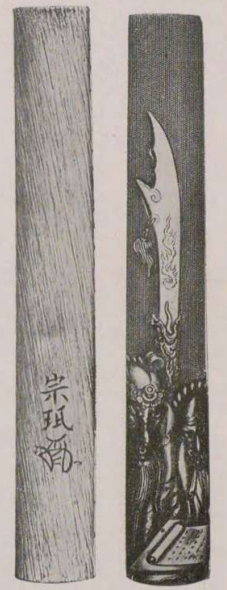
赤銅、七子地、高彫、色繪、虎圖、縁。
裏に金を削繼ぎ笹の片切彫あり。
悠然たる虎の姿態、熊笹を頗る大きく彫刻したる配合亦面白し。

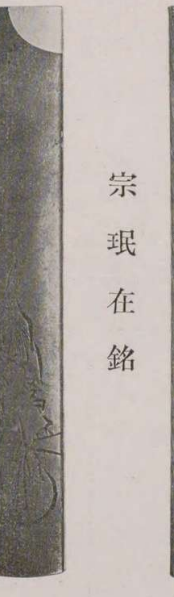
宗珉在銘

（宗祐の記錄に享保十二年九月頃の作とあれば五十八歳の作であります）

赤銅、裏板金、七子地、高彫、色繪、二王圖小柄目貫、目貫銅、色繪。
有馬家舊藏天下一の名物として古來名高し、田中一賀金工鐔寄所載の逸品。

宗珉在銘





赤銅、裏板金、七子地、高彫、色繪三國誌圖小柄。

之れも亦宗珉一代の傑作として古來推賞されし物であります。

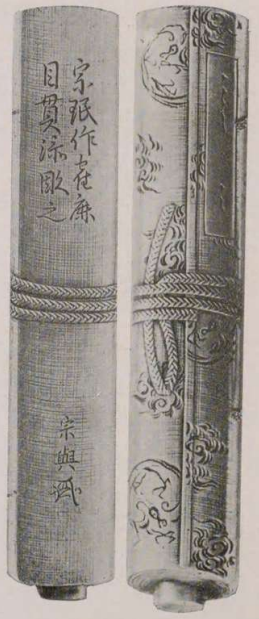
宗珉在銘

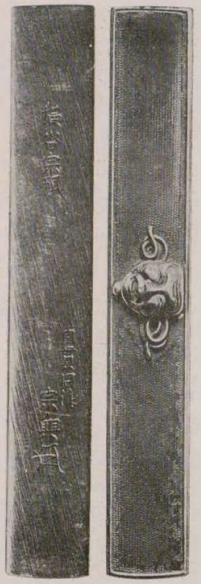
四分一、片切彫、人物圖或曰安部仲麿圖小柄。

下書帖四の冊に此圖あり夫れは表月の下に雲有り裏は劍纏ぎで積水不可極安知滄海東の文字がありますす即下繪の小柄は先年一見したものであり此小柄も全く同圖でありまして裏に文字がない點異つて居ります。

月を銀象嵌になしたる圖樣面白く先生得意の圖と見へ同圖の小柄三本あり一は戸尻銘又一は裏に詩文の片切がありました。

宗珉無銘（宗與が添へ作りたる小柄に極め彫付あり）





金、色繪、鶴鹿圖目貫小柄は銀形彫なり。

下書帖三の冊に下繪あり脇書に狩野即養筆とあり。

此圖福祿壽の留守模樣と云ひて世に稱讃せられしと見へ横谷一門、春明法眼までも模造したる物頗る多し。

之れより以下は作品の年代の順序は不同なる故御注意を乞ふ。

宗珉作宗與極銘（横谷姓を彫りたる物比類なきが如し）

裏哺金、赤銅、七子地、金紋、翁面圖小柄。

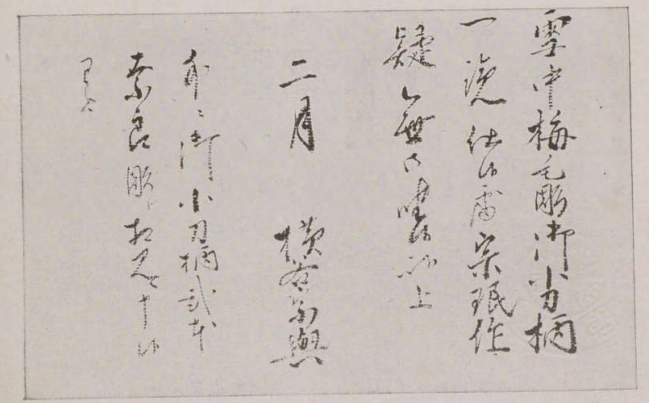
所謂青年時代後藤風の作、其の後藤風にして整行の器用なるを見るべきであります。

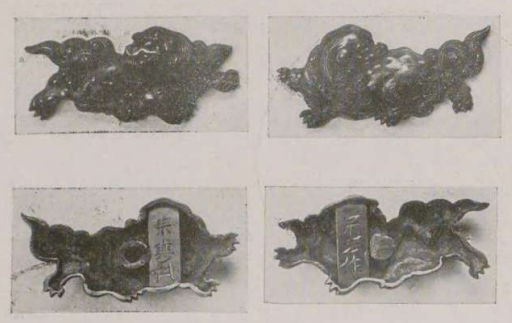
宗珉無銘（宗與鑑定書が添へられてあります）

裏哺赤銅、銀、片切彫、藁家雪持梅圖小柄。

下書帖四の冊に此下繪有り脇書に有馬様御小柄享保五歳子七月出來寫之とあります之れと續いて東坡の圖が付いて居りますが此雪中梅小柄は有馬家舊藏で全く此下繪と肯かれます。

共青年時代には狩野以外の下絵を用ひたるが之れも唐畫と肯かれます後年の下繪に比較して別人の感がありますが墨行は巧妙であります。



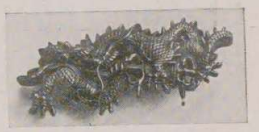


宗珉作宗與、極銘、金短冊入

四分一、斑金象嵌、獅子圖目貫。

下書帖一の冊に此下繪あり彩色にて金斑を現はしたる眞に此目貫を聯想させます猶下書帖には之れに附屬の裏哺三疋獅子の小柄が共に書かれて居ります。

純然たる横谷の風格備はりたる物にて精巧無比なる處極銘を入れられたる所以にして共活躍の狀見るべきものがあります。



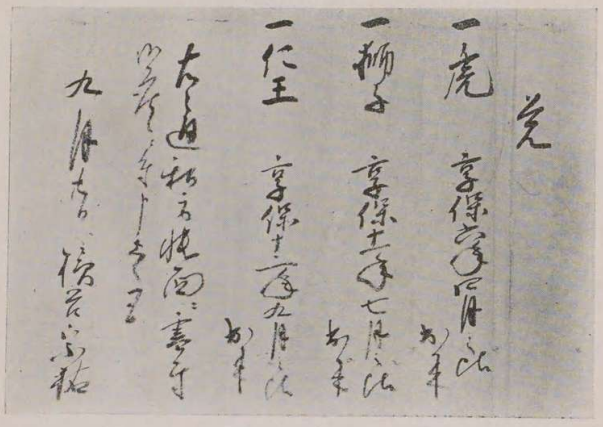
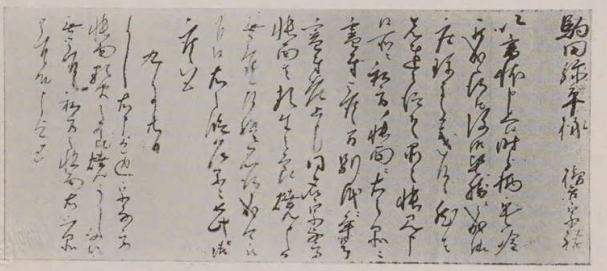
表目貫　同裏　裏目貫　同裏

宗珉作宗與、極銘、短冊入

金無垢、倶利伽羅龍圖目貫。
全然後藤の圖様にて頗器用に又精巧なる處宗珉若年の作と極められたるものと思はれます。

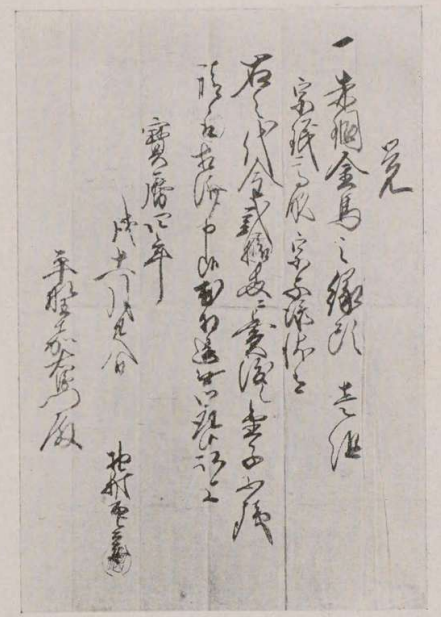
宗珉作在銘

銀、片切彫、眠布袋圖、鏡蓋、香合。
一蝶下書の得意の圖様にて整行巧妙にて無心の面像入神の技と思はれます此鏡蓋を用ひ鐵刀木を以て香合を作りたる物珍物であります。

横谷宗祐の記錄の寫と添章

（宗祐は宗與の兄英精にて此寫と添章は貴重な參考資料であります）



寶暦四年の請取書、其時代既に宗珉絲頭は金貳拾兩の高値、如何に昔より珍重せられしかを知る事が出來ます參考書であります。

宗珉の餘技として名高き畫幅

元祿丙子は九年にして二十七歳の畫、花押の異なりたる處注意すべきであります、又贊の千山は紀伊國屋文左衞門の俳名と云はれて居ります。

宗珉筆文珠畵幅

落款の宗珉の文字は全然小銘宗珉と一致する物、狩野流の畵風見るべきであり殊に名手と肯かれます。

宗珉筆獅子畵幅

達摩獅子の圖は金工作品に一致する處にして銘字は前掲同様小銘と一致する物。

以上の文珠、獅子の書幅は池田隆雄氏の愛品にして其箱の蓋裏に左の如く誌されて居ります。

此書幅は舊時大阪之刀劍老舗長濱屋に傳來所藏せしが同業者片桐八兵衛氏の手に移り尚亦明治の中頃同業親友濱田元七氏の有となり秘藏せられしをわが熱望の情を容れ愛を割かれしもの于時明治四十年なり宗珉翁の書誠に得がたき稀世の珍什にこそ大正八年夏日東雲居にてしるす

附日今は双幅なれども元來は三幅對として左に牡丹の圖ありしものならんか。

一到齋　隆雄藏

以上の寫眞により銘振り變遷の跡を見ますと種々變化の有樣頗る面白く感ぜられます、又桑原先生「宗珉銘彫と作振」の項に御研究の發表がありますが、其の要點を申しますと「小銘宗珉は宗珉の二字と花押の比例を見れば二字小なり且民のしが外方に向け長し又其一劃が横劃に交叉し居る點あり、其後作風が愈々所謂大宗珉風と進歩すると同時に、唯小銘を擴大せし如く見ゆるも、民字の横劃を最後の竪の一劃と交叉せず此點最も注意を要す、晩年に至り小銘宗珉時代に花押の頸にあつた二點は追々花押の中腹に下り來り、花押の形も竪長になり右が左より著しく下方に出て居る之を晩年銘と見るべきものと思考す、總じて、宗珉の宗の字、玉偏に就きても見所あれども、到底筆紙の盡す所にあらざるを以て、乍遺憾之を省略す」とあります。

死後餘光

宗珉の墓所のある等光寺を、桑原君が訪はれた記事を、左に掲げます。

予(桑原氏)等光寺住職に面せし時、同住職曰く、横谷家墓地は久しく、無縁の有様なりしが、後宗與二男傳三郎に縁故ある、田村喜三郎と云ふ人、盆暮節季に参拝をなせしが、数年前死去せられ、同人娘中川キミ子は今尚時々墓参をせらるゝ、別に芝區濱松町一丁目十五番地岩本寛齋氏は、名工の墓所の無縁となるを悲しみ、是又絶えず香花をたむけらるゝ由なり、予は其の特志を感じ、中川家、及び同家の親戚、池の端の村田煙管總本家を廻訪し、且つ序に宗珉系圖に付きて聞合したれども、要領を得ざりき、寛齋氏には未だ面會の機なし、予は以上諸氏の世に珍らしき特志を茲に附記するものなり。

以上は桑原氏の記事であります、大正十年頃と記憶して居ります、等が、舊店員日野雄太郎、血縁の祖母の墓域が、宗珉の墓所と同じく、光寺にありますので、某日展墓の序に、横谷氏の墓石を寫し來りて、無縁墓なりと云ふを聞きまして、追憶の情禁じ難く、早速參りて墓所を清め、香花を手向け、讀經靈を吊ひ、寺僧に聞きますと、此の桑原君の記事の後篇となるものがありますので、茲に掲げます、寺僧曰く或時(之は桑原氏により大正二年五月頃と解りました)東京美術學校關係の、海野勝珉翁を初め、一流の彫金家發起となり、盛大なる法會を營み、當日はさのみ廣からぬ寺の座敷も庭園も人を以て滿たされて、席上宗珉の追想談又は彫金術の講演等もありまして、頗

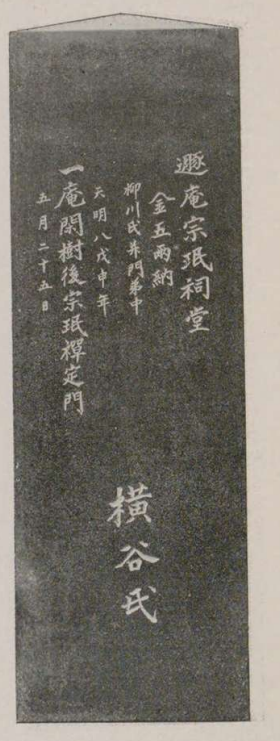
る盛況を極めたのであります、其の席に桑原君の記事にある、岩本寛齋老も出席して、非常に悦びて、述べらるゝやう「斯かる大家の御集合にて、法莚を營まれたる事は、嘸故人も滿足せられし事ならん、自分の如きは、血緣の者にあらざるも、同職關係上、名家の跡、無緣なるを悲しみ、同情して參拜したれども、今より以後は、諸大家に御讓り申すべし」と云ひて、去りし以後、又展墓に來らず、盛大なる法會は、故人の爲めには、幸か、不幸か、爾來又展墓參拜する人もないと云はれましたので、爾後を約して歸りまして、其後、杉山其日庵先生に此事を御話致しました處、是非追悼會をなすべしとて、其の御後援に依り、再び等光寺に至り、讀經吊靈並に展墓香花を手向け、翌日同氣俱樂部に故人本阿彌琳雅翁と共に會主となり、追悼會開催と同時に、藤田男爵家藏の名品獅子揃物を初め、數々の名品遺作を陳列し、

床に墓石の寫眞を飾り、花を手向け、順次燒香し、名品の觀賞に時を移し、又名人の追想談に花を咲かせ、風流に半日を過した事がありましたが、大正大震災の節は、等光寺も亦其の厄を蒙り、宗珉の墓石も倒壞燒亡致しましたが、一昨年に至り、等光寺の震災後の區劃整理決定と共に、其の特設墓地の一角に、橫谷氏の墓所新設するに當り、墓石面の彫付けの下書を認める事の依賴を請けましたが、幸にも震災燒亡前の寫眞に因り、昔の通りに、私が認めまして、墓石の彫付けも完成しましたので、此施主となりました、齋藤榮寬、日野雄太郎、及私の三人が立會ひまして、讀經の上、納骨式を行ひ、再び宗珉先生安住の地が定まりました。

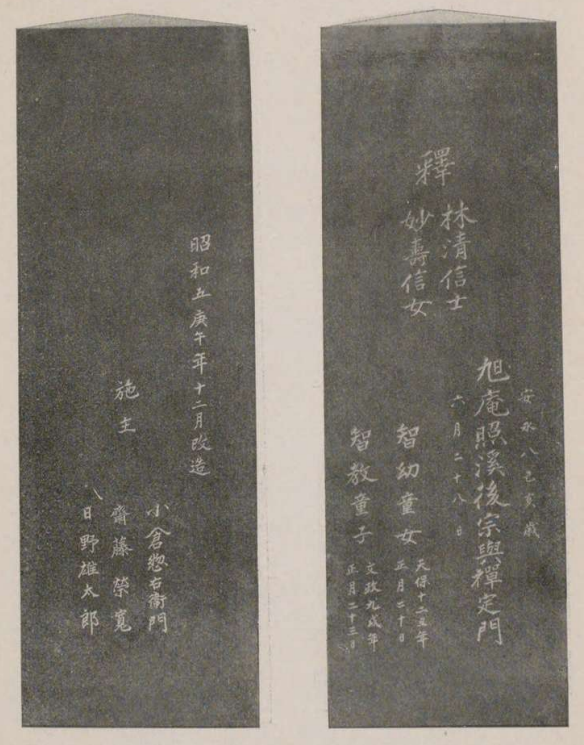
左に宗珉先生墓石の寫眞を揭げました。前揭の如く本年は宗珉先生の死年の享保十八年より正に二百回の年忌に當りますので、

其紀念として此刊行を致します所以のものは此彫金界に劃期を作りました偉大なる名工を世に紹介すると同時に諸賢と共に、之れを追想し旁其冥福を祈りたいと思ひます、諸賢も御閑暇の折、には一度其墓前を弔はれると共に其近傍に宗珉先生の舊墓石の臺石が、總墓の下にありますので夫れに彫刻せられたる水に蓮葉(勿論之れは石工の作)に往昔を偲ばれます事も亦風流道の快事と思はれます。

表面



右側



左側　裏面

昭和七年七月貳拾貳日印刷
昭和七年七月貳拾五日發行

〔定價金貳圓五拾錢〕

著作者兼發行所　東京市京橋區木挽町一丁目四番地　小倉惣右衛門

印刷者　東京市日本橋區蠣殻町一丁目四番地　香取壽郎

印刷所　東京市深川區冬木町十番地　周文館

232
383